
大切なもの～第2節～

ボロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大切なもの〜第2節〜

【Nコード】

N8696M

【作者名】

ボロズ

【あらすじ】

彼は地球とはかけ離れた異世界に迷い込む。彼は小説で読んだような魔法とモンスターがいる世界を想像していたが、あたりでもありはずれでもあった。

彼はそんな中、一人の男に出会う。

彼は何を考え、何のために戦ったのか…。

彼の本当の伝説がここにあり。

第1章第1話

数日前にさかのぼる。

俺は知らない少年に声に掛けられた。もちろん、街を秘密裏に散策している時だった。ばれたら、ラリーに殺されるからな。

「あんだ、ヒスイ・シヨウだよな。今は將軍の…。」

「ああ、そうだが…、少年君は誰かな？」

「俺の名前なんてどうでもいいんだ。すまないが、知り合いの爺さんがあんだを呼んでいてな。くそ爺の当たる占いだよ。まあ、迷惑かもしれないが聞いてくれないか？一応、ここにあんたが来るのもあたってはいるし、あんだにも悪い話ではないぞ。なんか、贈り物があるらしいよ。」

「怪しげな話だが、俺はこの住人には紹介していないからな。もしかしたらもしかする話かな？」

「さてな…。あの爺さんは話す人にしか話さないからな。じゃあ、俺は行くからな。この先に爺さんはいる。」

「分かった。」

「あんだか？占いの爺さんは？」

「待っておつたぞ。ヒスイ・シヨウ。俺の名を知っているだろうな。」

「ああ、久しぶりだな。隆爺。なんでこんなところにいるんだ？というよりも俺だけではなかったのか？この世界に飛ばされているの

「は？」

「そうではない。おそらく我々だけだろう。今はな…。」

「今は？それはどういうことだ？」

「俺の口からはそれは話せない。じゃがな、生よ…。お前の周りには黒い影がうつついておる。気をつけるのじゃ。最後にお前にやるものがある。」

と言って俺に剣を渡してきた。

「えらく重い剣だな。俺が持っている剣の中では一番重い。」

「とりあえず、その剣を抜いて見る。それがどう変化するかで、お前のこれからの先が見える気がする。」

「そんなに将来は見えないものなのかよ。」

「そんなものじゃ。」

俺が剣を抜くとこの剣は真っ黒になっていった。まあ、俺の能力と同じいではあるがな。

「そうか…、黒に…。」

「どうだ？分かったのか？」

「この国では黒は裏切りの色、そして絶対的な支配者を意味する。シヨウ、いずれはこの世界を完全に統一することができる可能性のある人だ。意味は分かるな？」

「なんとなく…。」

「お前は誰かに裏切られることになっている。だれかは分からんが…。そしてこの世界のことだが、自分で調べることだ。おそらくお前なら分かるはずだ。この世界に起ころうとしていることと先代がやるうとして失敗したことが…。」

「先代だと！一体どういうことだ？」

「すまないがこれ以上は話せない。俺も時間のようだ。」

「一体何の話だ？」

「じゃあな…また会うことになるだろう。」

『フッ』

彼の体が消えた…目の前から確かにここにいたはずだが…

「將軍、ここにおられましたか？早くお帰りください。…どうかしたんですか？」

「いや、何でもなし。行こう。」

あれから、ずいぶん調べまくった。もちろんながら、文献にはなかなか乗っておらず40・50は呼んだ気がする。しかし、何かがおかしい。そう思えてならない。今回の戦いで必要になるう援軍は俺の中では最優先事項であった。このままではこの街ごと自滅してしまう。俺が敵軍であれば城の反対側から通る。今回、相手はだれかも分かっている。情報はどんな時であれ命である。このまま、情報が入ってこないのであれば何もせず敗北してしまうだろうことは目に見えている。トールが言ったように援軍を送らないということはこの街を見捨てたと解釈することができるのも当然だ。もし、そうだとしたら俺をここに派遣した意味がない。考えられることは1つ。俺が捨て駒にされているのかもしれないということだ。ここで俺が敗北し殺されれば、戦争の動機としては十分だ。メドール国に「支配者」があらわれ、その者を殺したとして戦争を仕掛けることができる。ルーツからそういうことができるはずなのだが、その

文献が全く見つからないのがおかしいとしかいうことができない。
それにこの剣だ。俺だけにしか反応しない剣なんてそうそうあるも
んじゃないと思う。

「將軍、ギユスターブ殿から話があります。」
「分かった。入れ。」

第1章第2話

「將軍、内々なお話があります。」

「分かった。ラリーは外せ。」

「しかし…」

「そこにいるゴランもだ。皆分かったな。」

「…はい。」

全員が退出してギュスターブは深々とソファーに腰をかけた。どうしたんだろうか？彼にして落ち着きがなさすぎる。何か胸騒ぎがしてならない。一体何の話だろうか？しかもこのタイミングとは明らかに不審がるのも無理はない。今回の戦いではなく前の戦いに負けたものなのだ。逆恨みというのも十分に考えられる。実際のところそれぐらいしか…と考えていたところでギュスターブが話しかけてきた。

「將軍、いい資料はみつかりましたか？」

「一体何の話だ？」

「隠しても無駄ですよ。今、いろいろと調べ物をしているみたいですね。たとえば、歴史書をお探しになつていたりとか…。」

「なんだその言葉づかいは…お前じゃないみたいだな？」

「そうですね…いつもこのような感じだったと思いましたが？」

「嘘をつくな、そんな言葉づかいじゃなかっただろう？いつも食ってかかつてきたくせに…。」

「そんなことより大事な話があるのでですよ。分かっていますか？」

「何をだ？」

「ドラゴン様があなたを狙っているようですよ。それはどこの誰が

言ったんだ？」

「噂ですよ。ただ、トールが聞いた噂ではありませんがね……。さて、今回はそのことでお話があるのですよ。」

「どういった話：お前まさか……。」

「ええ、私共の国へ来ていただきたいと思ひましてね……。まあ、亡命という形になりますが、命の保証はできそうですよ。」

「うれしくないな、そりゃ……。」

「しかし、時間がないのも事実。こちらの国にはたくさんの文献があるのですから、そちらのご期待にも添えるかと思ひますが……。」

「お前がトールの……。」

「ええ、息子ですよ。そして、ギユスターブ様の陰でもあります。」

「そうか……。すっかりだまされたな。ということはギユスターブはダムイ国に捉えられていないんだな。」

「もちろんです。ていうか捉えられるわけがありません。彼は我々が皆集まってもかなわないです。それに能力も破格なものを持っています。あなたも対外ですが……。しかし、それ以外のことは聞いてませんね。あなたの秘密を知っているとも言っていました。それにもう一人異世界からきた可能性がある人がいらっしやるそうですよ。」

「！！！！！！」

「行くかどうかはあなたが決めることです。どちらにしても後1時間ぐらいで決めてもらいたいですね。」

「そうか、あいつらはお前の部下か？」

「ええ、ダムイ国が明日にでも来るそうですよ。しかもゴランがずいぶん沢山の兵を徴収しているようです……。」

「シヨウ様。早くお逃げを……。」

「どうした？」

「たくさんの兵がここに来ています。」

「どこの兵だ？」

「いや、判断がつきませんでした…」

「はつきり言え。」

「ええ…。おそらくゴラン様の兵だ…」

「分かった。」

もう俺がここにいる理由はなくなった。

第1章第3話（前書き）

遅くなりました。

第1章第3話

「お前らは先に行け。」

「しかし…。」

「危ないですよ。」

「大丈夫だ。偽ギユスタープはマリンを連れてここから離れる。」

「シヨウ様、まさか…。」

「仕方あるまい。心配するな、マリン。必ず戻る。」

「シヨウさん、あなたどうするつもりですか？あの人数に勝てるのも思っているのですか？馬鹿な考えはしないでください。これから討つ機会はいくらでも…。」

「違うんだよ。あくまでこれは俺を襲った奇襲だからな。こうもあろうかと仕掛けをしておいたのさ。それを発動させるだけだ。それとラリーを迎えに行ってくれないか？」

「何を言っているのです？彼女はこちら側の人間ではありませんか？」
「はい。お任せを。」

「頼んだぞ。マリン。」

「…後で説明を。我々は正門で待機しています。」
「分かった。」

まさか、城を作る際に考えた仕掛けがすぐに役に立つとは思わなかった。できれば、違う場面で使いたかったと思う。そろそろ来るころだろう。

『カチャカチャ、ガチャリ』

「シヨウ將軍、おとなしく…。」

『ギヤアアアア』

「お前たち…一体どこに？」

「下の階に落ちたのさ。」

「何？」

「城の概要を見たときに気づかなかったのか？この階はすべて一本の木を抜くところ以外の床が落ちるようになっていた。そして下の階には何がある？」

「！！！！！」

「そう、訓練兵の剣があるな。あれは刃が上に向けられていただろう。」

「いつから知っていた？」

「俺が聞いたのはお前たちが2日前から不穏な動きをしているということだったな。お前たちなんかよりも、もつと信頼できる部下がいるのさ。どちらにしても、俺は向かってくる敵まで見逃すような善人じゃないよ。ゴラン…。」

「あんたがいなけりや、俺たちは普通の戦争ができたんだ。お前たち「支配者」がこの大陸すべてをおかしくしやがる。」

「それは俺のせいではないだろ…。お前たちが俺を普通に扱ってくればそんなことはしなかったはずだが…。都合がいいように解釈することはどこも一緒だな…。」

「ほんととここでとらえるはずだったが…そうもいかない。」

「狙いは分かっているよ。時間稼ぎだろう？悪いが、これで終わるだ。」

『ボオオオオオ』

「くそ、能力か…。しかも緑…。」

「この炎はある物質以外消すことはできない。せいぜいがんばるんだな。」

「待て、くつ。」

俺はその後ろにある窓から縄で降りたが、そこには意外な人物がいた。

第1章第3話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

この作品は続き物です。

今更ですが…。

第1部から読んでいただいたほうがよいかも知れません。

感想等お待ちしております。

第1章第4話

「久しぶりだね、シヨウ。」

「玲!どうしてここに...。」

「あなたをずっと見ていたよ。」

「.....。」

「変ったね。前とは違って、大人になったよね。でも、そんな怖い血走った眼はしていなかった。」

「俺は変わってはいない。」

「いや、変わった。あなたは多くの人を殺し、自分の地位のために力の限りを尽くしている。」

「それは1つの味方に過ぎない。俺は自分があるべき世界に帰るために模索をしている。ここは俺がいるべき世界ではないんだ。それはお前にも分かっているはずだ。」

「そのためにここにいる人たちを殺しているの?」

「そういうお前が持っている剣はなんだ?血が付いているじゃないか?」

「!?!?!」

「どういう能力が知らんが、人の過去をのぞき見るような奴は好きになれないな。そうだろ、ドラゴン。」

玲の姿が陽炎のように変わっていった。初めて会ったあのとときと同じ顔をしている。

「...どうして分かった?」

「俺の能力が目覚めたみたいだ。少し前だが...。」

「その剣のせいではないかな?」

「.....。」

「その剣をどこで手に入れた？それは我々が長年探してきたものだ
が？」

「そんな話は知らんな。気づいたら手にしていたが？」

「…仕方ない。お前には悪いがその剣をもらうぞ。」

「すまないが、やることはできないな。」

「じゃあ、死ね…。」

『ビュッ』

そう言いながら、彼は正面から切りつけてきた。俺はそれを左に避け、彼と少し距離をとった。あの正統派の構えは俺が知っている中では1人しかいない。というよりもこの国では決まった型が存在しないのだ。

「お前だったんだな、ルカイ…。ドラゴンがここまで来ることはないと思っていたが、お前まで来ているとはな…。本気で俺を殺すつもりだったらしいな。」

「…おそらく違うと思われます。その剣さえ置いて行けばドラゴン様は殺しはしないはずです。」

「獄中で死ぬってやつか？」

「……………」

「すまないがそれはできない。これは大切な人からもらった形見だ。」

「ドラゴン様は本当にこの世界を変えようと思っておられます。そのためにはあなたの存在は邪魔にしかならないのです！」

「本当にそうなのか？」

「何ですか？」

「すべての歴史書からほんの20年間だけがなくなっている。」

「それが？」

「俺は真実を知りたいだけだよ。ドラゴンだけでなくダムイ国も俺を狙っている。おそらくあと三つの国もそうだろう。だが、ジャン国だけは俺を招き入れようとしている。この関係性がどういうものなのか、おぼろげなくが見えてきた。それを確認したい。」

「そこまで…。しかし、あなたはここで終わりだ！」

『ゴオオオオオオオオ』

「これは…。フライドラゴンか？一体どうしてこんなところに？彼らは別に住むところがあるはずだが…。」

『ギヤオオオオオ』

「どちらにしてもここは引かせてもらおうよ、ルカイ。また会うこともあるだろうが、俺を倒すにはかなりの兵を連れてこないといけないと思うぞ。」

「くっ、ゴランがいれば…。」

「…人に頼っているようじゃ、俺には勝てないな…。じゃあな。」

俺はそう言ってフライドラゴンに飛び乗り、正門へ向かっていった。

第1章第4話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

感想等お待ちしております。

第1章第5話

「ものすごい登場の仕方ですね…。」
さすがの偽のギユスターブも驚きを隠せないようだ。

俺がこの能力を使えるようになったのはこの剣を持って訓練していた時のことだった。信頼できる部下に恵まれてはいるものの何か不穏な影がちらついていたこともなんとなく分かってはいた。

それは2日前のこと…。

俺がもう遅いので寝ようとするところの火を消したときに、窓からイアグが入ってきた。

「シヨウさん、少しお話があります。」

「もう少ししまともには入ってこれないのか？」

「ええ、すいません。しかし、内密の話ですし、それに味方の話でもありません。」

「分かった。味方にも聞かれない話なんだな。」

「それにしてもこんな時にこんな話をしたくはないんですが、しょうがないのかもしれないね。どこがおかしな感じでもありませんからね。あなたが將軍になった時からですが…。」

「…？話が見えないのだが？」

「ドラゴン国王があなたを狙っている可能性があるのです。」

「…：…：そんなことはないだろう？」

「本当にそうだと言えるのですか？この国を調べているあなたなら気が付いているはずですよ。異世界の人間は殺され続けているという事実があることは知っていますね。あなたはまだ、襲われていない。」

それはなぜだかわかりますか？」

「…戦争か？」

「そうですね。戦争の引き金として殺そうとしているのですよ。異世界の「支配者」であることと将軍であることを理由にしてダムイ国に戦争を仕掛けることにしているのですよ。本当はその先にある。」

「ジャン国か？でも、あそこの国は全然作りが違うはずだが？」

「そうですね、どちらかという国王が支配する形で今の形と全く違います。しかし、それはその時の支配者が君臨した時のまま残してあるからです。彼の名前はよくわかってはいませんが、彼も今、シヨウさんが持っている剣を持っていたと言われています。単純に言えば、本来の国はジャン国ということになるのです。だからこそドラゴン国王はあなたを利用してその剣を手に入れ、正当な「支配者」としての地位を確立させようとしています。」

「それで…。なんで、お前は俺にそんなことを言ったんだ？俺の剣を盗めば、それで戦争は回避されてここの住民は助かったはずだ。」

「そうですね…。しかし、今、住民は安心して生活しているように見えます。私は裏と表の世界を支配できるものがいるんなことできて、そして住民を危機から救えるものだと思っていました。だが、現実には腐敗したものとそうでないもののはざまに立ち、あらゆるものを見通せるだけに過ぎなかった。表に出れば嫌われ、裏に出れば汚い話ばかり…。見守ることしかできない日々が続きましたが、私もようやく自警団を建てて、住民の意見を聞くことができるようになりましたが、あなたはすぐに聞くことができた…。私とは違うやり方でしたが、力で支配するやり方もあったのですね。私がいかに狭い視野で物事考えてきたか分かりましたよ。」

「それだけのために俺に密告したのか？それとも自分で調べたのか？」

「その答えはおそらく数日後に出るでしょう。」

「もし、俺のためにやったのなら君らしくもないな。」

「一族の遺言でね…。まあ、自分らしくないのは自分でも分かって

いますよ。あなたに協力するのはここまでです。後は状況に応じて変化しますね。頑張ってください。」

「そうか？まあ、気楽にやるよ。あくまで噂だからな。」

「失礼します。」

窓から降りるのか。きっちりしているな。

俺に残したものの。それがこの剣か…。

重そうだし、少し練習しておくか…。

俺は剣を握った。その瞬間、俺は光に包まれた。

「最近は何があっても驚かなくなってしまったな。」

「お前が火水生か…。父にそっくりだな。」

「お前は誰だ？ここはどこだ？」

「質問が多いな、シヨウよ。ここは精神世界というものだよ。そし

て俺はこの剣に宿る初めの「支配者」だ。」

「お前は俺に何を求めているんだ？」

「この世界は元の世界に帰るべきなのだよ…。」

「本当にそんなことが……。」
「残念ながら事実だ。いろんなことがあるだろうが、俺が言えるのはこれだけだ。後はお前たちの世代が作っていく時代だ。好きにやればいい。俺が使っていたフライドドラゴンの召喚できるようにした俺の役目はここまでだな……。俺には解決の余地はあると思っているぞ。シヨウ。さらばだ。」

気がつくとその時は暗闇だった。

「さて、行くうぜ。ジャン国へ。ラリーも元気そうだな。」
「……………」

まあ、分からなくもないがな。

「予定よりも早いですが、それに越したことはないですね。今すぐ出発します。シヨウさん、フライドドラゴンを還してもらえますか？馬が怯えて困っています。」
「分かった。」

俺の旅もこれから長くなりそうだ。

第1章第6話

「ここは一体、どこだ？ギユスターブ偽。」

「さあ？」

「目の前にいるのは何なんだ？マリン？」

「おそらくキングベアーかと…。大きな熊ですし…。」

くそ、こんなことになるなら1人で行ったほうがまだ良かった。地図を持ってきたのに見る奴が見方を知らないとは…。まあ、一般のところに地図なんて売ってないから仕方ないんだけどね。でも、読めないなら読めないって言ってよ。こっちも有難迷惑って感じになっちゃうからさ。それにしてもでけえなこの熊。5メートルはあるぞ。何食って生きてんだ。

『ガオオオオオオ』

「うおっ、やべ。逃げるぞ。」

「シヨウさんこの道をですか？」

「……………無理だな。」

そういえばここ山奥だった。俺たちはメドール国から出て、東の橋を渡り、本当なら北へまっすぐ行くところを山道を利用すれば分からないと考え、道とは50キロぐらい離れた山道にいたのだが…。これはまさに茨の道だった。とはいっても、休み休みな上、100人ぐらいの人数で移動していたので動物を狩って、生活してきたのだが、それがどうもまずかったらしい。普通、自分たちの縄張りがあらされりゃあ、人間でも怒るな。おかげで食料はだいぶあるんだが、移動が遅くなってしまった。

「さて、仕方ない。能力を使うか…。許せ、死なせはしない。」

『ボオオオオオオ』

「スッ」

「ますます便利になっていきますね。炎を出して、その炎を吸収できるとは…。いいですね。その能力ほしいです。」

「まあ、やれんことはないがお前には無理だよ。」

「？」

「…………先を急ぎましょう。このようなことばかりあつては体が持ちません。」

「そうだな、のぼりもここで最後みたいだな。あとは下るだけだからうまくいけば今日中にも下つ、！！！！！！誰だ！？出てこい。」

全員戦闘準備。」

「そうですね。あまり見られるのは好きではありません。」

「シヨウさんを狙うものは許しません。」

「同じく、あなた方は何者です？」

「おつ、ラリー元気になつたか？」

「のんきなことを言わないでください。」

『悪意は感じられませんよ、マスター。』

『そうだろうな。どこかの諜報部員というわけでもないと思うな。ここで悟られるようじゃだめだし。』

「あなた方はどこに行くんだべ？」

えらい訛りがある。だべ？そんな言葉を使う奴がこの世にいたか！いや、俺は異世界から来たんだったか？実際にはいるかもしれないのだけど…。

「子供ですか？」
「何とも言えないな。」
「ここで何をしているんですか？」
「あなた方を待っていたんだべさ。」
「ほう、ギユスターブっていうのはすごく頭がいいんだな。」
「まあ、正式にはジャン13世ですけどね。」
「ふーん。まあ、いいや。」
「じゃあ、俺たちと一緒に来るんだよな。」
「いや、シヨウさん、ここでお別れですよ。」
「……は……っ？」「……」
「あなた方、3人だけで行ってもらいます。」
「わざわざ、ありがとな。ということはお前らは二重スパイか？」
「ええ、ということでああなたの髪をいただきますね。」
「分かったよ。」
「この男についてジャン国まで行ってください。おそらく4人であればそれほど時間はかからないでしょう。」
「私たちはついて行ってもよいのですか？」
「来る予定ではありませんでしたからね。まあ、見張りはつくと思います……、シヨウさんの隣にはいることができると思います。もし、殺すなら、ここで実行してたと思いますしね。」
「……………」
「俺たちは出発しよう。ここまで送ってくれてありがとう。またいつか。」
ここで皆とは別れたわけだが、よく見るとツールやステーがないことにいまさら気がついた。もう少し、気を配らないといけないと思った俺だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8696m/>

大切なもの～第2節～

2010年12月16日13時07分発行